



TITLE:

現代インドにおける食と宗教ーク
リシュナ意識国際協会の奉仕を通
じた味わいの共同性ー(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山岸, 伸夫

CITATION:

山岸, 伸夫. 現代インドにおける食と宗教ークリシュナ意識国際協会の
奉仕を通じた味わいの共同性ー. 京都大学, 2016, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19834>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

| | | | |
|--|--|----|-------|
| 京都大学 | 博士（地域研究） | 氏名 | 山岸 伸夫 |
| 論文題目 | 現代インドにおける食と宗教 ークリシュナ意識国際協会の奉仕を通じた味わいの共同性ー | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>本論文は、クリシュナ意識国際協会（以下、ISKCON）の活動を事例として、現代インドにおける食と宗教をめぐる実践を描写し、それがいかなる新たな社会関係の構築を伴っているかを検討する。神への供物のお下がりであるプラサーダムをISKCONの外にも提供することで、食の味覚経験を通じて宗教性と公共性を媒介する「味わいの共同性」が新たに構築されつつある、と本論文は主張する。</p> <p>序論では、宗教と食に関する先行研究を検討し、本論文の視角を示す。本論文は、記号的な意味体系を中心に議論されてきたこれまでの研究を乗り越えるために、食と宗教に通底している身体・情動的な関係性に着目する。</p> <p>第1章は、デリーにおける食と宗教の状況を概観する。経済自由化とグローバル化によって、特に1990年代から食の商品化や宗教祭礼のスペクタクル化が進行する一方で、社会経済的格差が拡大している。そのような状況下で、さまざまな人々のニーズを満たし、新たに人々をつなぎなおすような新たな食や宗教のありかたが希求されている。そうしたなかでISKCONは、多様な個人や集団を対象とする公共的に開かれた活動を展開するようになっている。</p> <p>第2章では、ISKCONの歴史的背景とその食をめぐる実践について概観している。チャイタニヤ派の教えを根本とするISKCONでは、性的な官能性を否定しつつ神への信愛を遍く徹底させるために、自らの情動や官能性を味覚の実践に向けた。そしてプラサーダムを味わうことを神への奉仕であるという意味づけをする。さらにISKCONでは、プラサーダムを広く社会に提供することを「食を中心としたバクティ運動」として位置づけ、積極的に展開するに至っている。</p> <p>第3章では、デリー・ISKCONの中心的な寺院における、もてなしの実践と社会との関係について記述している。寺院では、神像への献供、僧侶・信者への分配、参詣者や一般の人々への分配というように、食の空間が多層的に広がっている。こうした食の空間の多層的な広がりや、都市への移民や中間層の大規模な寄付、スペクタクル化する祭礼といった都市的な状況に支えられている。</p> <p>第4章では、ISKCON信者による料理書の出版と寺院内に構えるレストランの経営について論じている。健康や精神性の観点からグルメな菜食料理に興味がある都市中間層の間では、ISKCONの料理書よりもレストランが広く受け入れられている。様々な戦略で客を惹きつけようとするレストランでは、神への奉仕は背景に退き、味やサービスの洗練化が目指される。そのなかでレストランでのプラサーダム提供</p> | | | |

の意味をめぐって解釈に多義性が生じている。

第5章では、ISKCONの伝統とされてきた山車巡行ジャガンナータ・ラタヤートルーの分析を行う。一年に何回も様々なエリアで開催されるデリーのラタヤートルーでは、山車が進むストリートでプラサーダムが大規模に提供されている。そこでは広く人々に開かれた形で、プラサーダムのカジュアルな分配と消費が行われる。一方で、道行く人々の反応は多様であり、ときに保守派からの批判の対象になることもある。

第6章は、ISKCONの支援組織として創設されたISKCONフード・リリーフ・ファウンデーション（以下、IFRF）の活動について論じる。現在、デリー首都圏の多くの公立学校で、IFRFによってプラサーダムが給食として届けられている。ここでは、プラサーダムの分配は、教育や福祉という公共的な位置づけをもつようになっており、ISKCONを超えたさまざまな個人や集団がこの活動に携わるに至っている。またそのなかで、プラサーダムそして学校給食のあるべき実践をめぐって、さまざまなアクター間で摩擦が生まれていることにも触れている。

結論では、ISKCONの食をめぐる活動は、神像への奉仕という寺院内のものから、人々への公共的な奉仕へと広がっていることが指摘されている。プラサーダムのもてなしと共食は、それ自体が自己と他者をつなげる身体・情動的な運動であったため、その記号論的な意味にさほどとらわれることなく、多様な人々を結びつけることにある程度成功している。聖なる食の「味わいの共同性」は、異なる立場や価値をもつ者を身体・社会的につなげ、そのつながりのなかで各自が宗教と公共に関わる自らの立場を問い直す動きをもたらしめている。

(論文審査の結果の要旨)

従来のインド世界における食と宗教の研究においては、記号論的な分析を基盤に、儀礼食のやりとりがいかに神々や聖者そしてカーストの異なる人々を結びつけたり分離したりするかが論じられてきた。つまり寺院を中心にやりとりされた食は、儀礼共同体における神と人、そしてそれを媒介にした人と人の社会関係を象徴し構築する記号とみなされてきた。そこにおいては寺院を中心として構成される儀礼共同体の社会関係を、儀礼食の記号的意味や交換関係から読み解こうとしてきたのである。しかしそうした観点からは、ISKCONのように儀礼共同体を超えてストリートや学校給食という公共領域の場でプラサーダム（供物のお下がり）を提供する活動について十分な理解をすることができない。そこでは記号の共有された意味は存在しないからである。

本論文は、ISKCONがプラサーダムを公共領域に提供することで生じる、宗教性と公共性が矛盾を含みながら媒介された新たな社会的ダイナミズムに着目する。そして、長期のフィールドワークおよび文献史料に基づいて、現代インド・デリーでのISKCONによるプラサーダム提供活動の社会的意味をつぶさに検証している。そこで本論文が着目するのは、食の記号的意味ではなく、食が実際の場でどのように経験され、いかなる社会的行為がその経験を軸として生まれていくかの過程である。そこでは、多様なアクターが食の味覚経験を通じてつながりながら、その食の意味やありかたについて社会的交渉と自己反省が起きる場としての「味わいの共同性」が構築されつつあると、本論文は論じる。

本論文の意義としては以下の四点が挙げられる。

第一に、ISKCONの活動について、特にプラサーダム提供活動を中心に、その料理・献供・分配の内容、方法、組織、過程について、長期の参与観察に基づく綿密で詳細なデータを提供したことである。特にISKCONによる公共領域でのプラサーダム提供活動にかかるデータは貴重である。

第二に、ISKCONの活動の民族誌的描写を通じて、現代インド・デリーという都市の一側面を生き活きと描いてみせたことである。宗教と公共、信仰と福祉、食とストリート、布教と商売などがクロスオーバーしながら生まれる新たな動態を活写したことの貢献は大きい。

第三に、プラサーダムの社会的意味について、従来の記号論的解釈を超えて、食の味覚経験とその身体性・情動性の側面に注意を向け、それを軸とした社会的相互行為のありかたを論じたことである。これは、現代インド社会における食を論じるにあたって新たな視角を提供するものであり、特にプラサーダムという宗

教的な食が、儀礼共同体を超えてどのように経験されているかを論じるにあたって有効な視座である。

第四に、「味わいの共同性」という枠組みから、記号論的な意味を共有しない多様なアクターが、同じ料理を味わうという経験を媒介として社会的交渉と自己反省を展開する過程について論じたことである。こうした観点により、本論文は、宗教および公共に関する従来の規範的・構造的な見方を超えて、相容れないと考えられていた諸領域が食を通じてつながり、そこでおいしさ、栄養、福祉、奉仕などの意味が多面的な社会的相互行為を通じて問い直される過程を描くことに成功している。

以上のように本論文は、ISKCONのプラサーダムを中心とする活動を緻密に検証することによって、現代インドの食と宗教についての新たな理解の可能性を示した優れた研究である。それは南アジア地域研究および宗教研究に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。